熊日1959.11.15

水俣病 カギを預った知事

年こせぬ漁民たち

解決長引けば再び悪化

工場廃水と補償をめぐって紛争を巻き起こし、大きな波紋を投げかけた水俣病問題は、県漁連と新日窒水俣工場との間に寺本知事が入ってあっ旋に乗り出すメドがついたことから、新たな転機を迎えた。あっ旋のなかに漁業補償だけでなく、病気そのものに対する補償が入るかどうか、また会社側があっ旋依頼の条件として知事に要望した"公正な委員会"の内容がどうなるかなどがまだ不明だが、これらのことも含めて、今後の問題解決のカギが寺本知事にあずけられた形になった。

◇…十日の県漁連について、十三日に新日窒が知事にあっ旋を依頼したことから、行き詰まり状態にあった双方の対立に解決の糸口が与えられた。さる六日、県議会運営委の要請で、岩尾議長が県漁連と新日窒双方に"知事を仲介者とするよう"申し入れ、双方の出方が注目されていたもの。"もし会社が私のあっ旋を拒めば最悪の事態が起こるだろう"と語って上京した知事の心配がひとまずなくなり、会社側のあっ旋依頼で漁民も十五日の実力行使を回避する方向に進んだわけである。

◇…十五日に不知火海沿岸漁民が工場を襲撃するという説について、村上不知火海水質汚濁防止対策委員長は"計画的なものではなかった"と否定はしたが、関係者の話では、実は追い詰められた漁民の一部で、実際に計画されていたもののようだ。それが岩尾議長や荒木県議らの説得や会社のあっ旋依頼という客観情勢の変化があって、コトなきを得たというのが真相のようだ。漁民のなかには"歳を越せないものが多く"(村上対策委員長の話)知事のあっ旋が長引けば再び不穏な計画が立てられる可能性も残っている。

◇…このようなひっ迫した空気のなかで、これから知事を仲介者として会社側と漁民との話し合いが始まるわけだが、会社側は"水俣湾はともかく、不知火海全域には工場排水の被害はなく、ましてや病気そのものの原因が工場にあるかどうかも不明だ"との基本態度だし、いっぽう漁民は"水俣病騒ぎで三千一億円の被害を受けた。また病気も工場廃水によるものだ"と信じている。この双方の大きな距離を知事がどう埋めて解決にもち込むのか?カギは知事が握ったとしても相当の難航が予想される。

また漁民側は工場が浄化装置を完成させる年末まで、だまって廃液が海に流されるのをみているわけにはいかぬとの態度であり、知事が帰任する十八日以降に直ちにあっ旋が始まったとしても、年末までの短時日のうちに双方を歩みよらせるかどうかが問題だ。このようなことから知事は"一触即発"の状態にある漁民を抑さえるためにも、同調査会の中間答申を武器に、これからのあっ旋で病気補償をも会社側に出すよう要請するのではないかとの見方もある。

◇…会社側では知事に"漁民の立場でモノをいう人物"とのレッテルをはっているようで、十二日知事が吉岡社長と会ったさいもあっ旋依頼についてはっきりした態度を示さなかった。十三日同社長があっ旋依頼の希望条件として"公正な委員会"をつくるよう知事に要望したのはこのためだとみられる。委員会の内容、構成がどのようなものになるかまだ不明だが、ともかくも事態が好転するか、再度悪化するか、そのすべてがこれからのあっ旋の推移にかかっているようだ。しかも今月中がそのヤマだとの見方が強い。